岡山大学の人々4

４回目は、南極観測隊のメンバーだった財務部経理課の正富一孝・契約担当統括主査です。

地上最後のフロンティア・南極大陸。不思議に満ちたこの大地に降り立った本学職員がいます。経理課契約担当統括主査・正富一孝さんです。

正富さんは国立極地研究所（東京）に勤務していた１９８３（昭和58）年11月、第25次南極観測隊の夏隊の一員として南極に向かいました。一昨年退役した南極観測船・初代「しらせ」の処女航海でもありました。

１ヶ月半・１万５千キロの船旅の末、南極圏に到着。観測隊は南極大陸にほど近い東オングル島の昭和基地を拠点に観測を開始しました。正富さんは物資を大陸に運ぶ輸送任務の事務責任者として業務にあたり、任務終了後は基地の設営や研究者とともに観測に従事しました。

正富さんにとって、南極は「感動の連続」でした。見渡す限り３６０度の地平線が広がる光景、白夜で「太陽が地平線を転がる」様子、入り江を埋め尽くす何千羽というペンギンの群れ。それらは「現地に行って直接目で見なければわからない。ことばではとても言い表せない」感動を与えてくれたそうです。翌年４月、「しらせ」で晴海埠頭に到着した際、前年に生まれた娘さんがヨチヨチ歩きで出迎えてくれたのも「忘れられない思い出の一つ」と語ります。

気になる南極での生活ですが、到着したのは、一月で、南半球の南極は真夏。零下２・３度と冬の北海道と同じくらいの気温で、身が凍えるほど寒いということはなかったそうです。「風がなければＴシャツでも過ごせた」というから驚きです。

食事も夏隊に関しては豊富な食料があり、海上自衛隊が提供してくれるため、さほど不自由はなかったそうです。ちなみに冷蔵庫は「食料を凍らせないために使う」とか。

観測隊は、大学の研究者や関係官公庁の職員、メーカーの技術者などさまざまな職業の面々が集い、みな初対面でしたが、とてもチームワークが良かったと言います。その理由として、正富さんは「目的が一緒だった」ことをあげます。観測隊全員が「南極観測を成功させたい」という思いで一致していて、互いに助け合う雰囲気が自然に形成されていたそうです。冬は作業が困難になるので、夏隊は越冬隊のための準備で働きづめになります。ちょうど白夜で、観測隊員は一日18時間働くこともあり、その場に倒れ込んでしまうことも珍しくありませんでしたが、そんな時でも互いをフォローし、乗り切っていきました。

その結束は固く、30年近くたった今でも仲間と親交があります。さらに、２００７年、南極観測隊ＯＢ会の岡山ブロック幹事として、山口立雄教育学研究科教授や五百籏頭（いおきべ）健吾自然科学研究科助教ら本学の観測隊ＯＢとともに、創立五十周年記念館で「南極観測50周年記念講演会」を開催するなど、世代を超えた交流も行われています。

正富　一孝
（まさとみ　かずたか）
昭和28年、岡山県瀬戸内市生まれ。
国立極地研究所をへて
昭和63年から本学職員。

本学には１９８８（昭和63）年に転任。歯学部の用度係をふりだしに経理畑を歩みました。職場でのモットーは「みんなでやろう」。チームワークで困難な課題に取り組みます。「昔のことなんで、忘れたよ」と照れ笑いされますが、「ひとりではできないことでも、みんなでやればできる。みんなでやればできないことなんてない」と語るその声の力強さに、南極での経験が脈々と息づいていると感じました。